戦前期における中等学校文化に関する研究

――岡山県を事例にして――

渡　辺　一　弘
（広島大学大学院）

Ⅰ．研究の目的

本研究は，戦前期における中等学校，特に大正中期以降創設の学校に焦点を当て，明治期に創設の学校との学校文化（校風）の違いを，学校の教育方針，行事，進学状況等を通して，岡山県の事例をもとに検討するものである。

戦前期，中等学校入学志願者は大正中期以降著しく増加した。入学難の緩和のためと原敬内閣の高等学校，専門学校の大増設の政策に呼応して，地方でも中等学校（主に県立）の増設が行なわれた。それまで中等学校が設置されていなかった地域はもちろんのこと，地方の都市部ではこの時期，既存の県立中学に対して「二中」[1]という名称の学校もいくつか創設されていった。例えば中国地方では，広島県の広島二中（大正11年開校）・呉二中（大正13年開校），鳥取県の鳥取二中（大正12年開校），岡山県の岡山二中（大正10年開校）などである（表1）[2]。

表1　二中の名称の旧制中学一覧

開校年	校　　名
明治32年	金沢二中、京都二中
明治33年	仙台二中
明治34年	東京府立二中、鹿児島二中
明治41年	神戸二中
明治43年	沖縄二中
大正2年	札幌二中
大正3年	横浜二中
大正10年	岡山二中
大正11年	広島二中
大正12年	松本二中、鳥取二中
大正13年	東京市立二中、浜松二中、呉二中
大正15年	豊橋二中
昭和2年	日大二中＊
昭和3年	岐阜二中
昭和10年	天理二中＊

文部省「全国中学校ニ関スル諸調査」より作成　＊は私立

これら「二中」は，当然のことながら「一中」に対して追いつき追い越せの学校方針の下，教職員・生徒一丸となって校風を作っていったが，その校風は「一中」を模範として形成されていったのであろうか，それとも「一中」とは異なる独自のモデルを目指して形成されていったのであろうか。そしてそのような学校の風土は，戦後に「二中」の伝統を引き継いだ学校において，学制改革，高校再編，入試制度の変化等に伴いどれほどが受け継がれているのだろうか。

本研究では，そのような大正中期以降創設の中等学校文化（校風）を明らかにして，それがどのように形成され発展していったか，ということを学校の沿革史を中心とした記述資料を用いて検討することを目的とする。

Ⅱ．事例研究の対象

今回の報告では岡山県の事例を取り上げ，具体的には岡山二中を分析対象とした。岡山二中（正式名称は岡山県第二岡山中学）は，1921（大正10）年4月開校。初代校長には，岡山県視学武居魁助が就任し，以後1945（昭和20）年3月まで25年間もの長期にわたって校長を務めた。戦後学制改革により「岡山県立第二高等学校」と校名改称し，1949（昭和24）年8月「岡山県立岡山第一女子高等学校」（旧岡山一女）と高校再編成により両校統合され，岡山県立岡山操山高等学校となる。

岡山二中開校時（大正10年）直前，県下の県立中学は岡山（後の岡山一中）・津山・高梁・矢掛の4校，私立中学は関西・閑谷・金川・金光・天城・興譲館・岡山黌の7校であった。大正9年の入学志願者100に対する入学者は，公立32.53，私立58.30，全体で44.45という状況で，特に岡山中学では，志願者100に対して入学者は17.38という非常に厳しい状況であった。このような情勢の下に県立中学増設の機運が高まり，大正10年岡山二中が開校し，大正12年には勝山中学が開校した。また大正10年には閑谷中学と天城中学が県営に移管され，さらに入学難の対策として県立中学の学級増も進められた（創立百年史編集委員会 1999,91頁）（表2，3-1，3-2）。

表2　大正期の岡山市内各中学校の入学志願者倍率

校　名	1914（大正3）年	1917（大正6）年	1920（大正9）年	1921（大正10）年	1923（大正12）年	1925（大正14）年
岡山一中	4.1	4.0	5.8	3.1	2.3	2.0
岡山二中	－	－	－	3.3	2.2	2.4
中学岡山黌＊	1.3	1.6	1.3	1.7	1.5	1.4
関西中学＊	1.6	1.5	2.0	1.4	4.1	1.4

岡山県史編纂委員会『岡山県史 第十一巻 近代Ⅱ』601頁より転載，一部訂正
＊は私立

表3－1　大正15年の岡山市内各中学校の学級数と生徒数

種別	校　名	創立年	学級数	生徒数	生徒定員
県立	岡山一中	1874年	24	1,074	1,200
同	岡山二中	1921年	24	1,004	1,200
私立	中学岡山黌	1909年	9	426	600
同	関西中	1894年	20	996	1,000

文部省「全国中学校ニ関スル諸調査」より作成

表3-2 大正15年の岡山市外各中学校の学級数と生徒数

種別	校　名	創立年	学級数	生徒数	生徒定員
県立	津山中	1895年	18	793	1,000
同	高梁中	1895年	15	628	700
同	矢掛中	1902年	15	593	700
同	天城中	1908年	14	579	700
同	関谷中	1903年	10	421	500
同	勝山中	1923年	8	334	500
私立	金川中	1904年	10	379	500
同	金光中	1894年	15	714	750
同	興譲館中	1853年	14	655	700

*天城中学と関谷中学は1921(大正10)年県立に移管
文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』より作成

III. 分析方法と分析資料

(1) 分析方法

『新教育社会学辞典』によると,「学校文化」とは学校集団の全成員あるいは，その一部によって学習され，共有され，伝達される文化の複合体で，1)物質的要素（学校建築，衣服等），2)行動的要素（行事，生徒活動等），3)観念的要素（教師ないし生徒集団の規範，価値観等）の三要素から構成されるという[3]。本研究では便宜上この概念に従い，この三要素に依拠し，これらと上級学校進学状況，教員の学歴等を通して，学校の伝統がいかに保持され，継承されていったか，ということを次に示した分析資料を中心に，岡山二中の学校文化を検討していく。具体的には，1.物質的要素：衣服（制服，制帽），2.行動的要素：校友会，軍事教練，3.観念的要素：学校の教育方針，生徒の価値観・態度，4.その他：上級学校進学状況，教員の学歴・学閥状況，を分析する。これらを，岡山二中の創設期（大正10-15年）から発展期（昭和2-15年），戦時期（昭和16-20年）にかけて回想をもとに，できるだけ明治期創設の岡山一中の状況と比較検討する形で分析する。

(2) 分析資料

〈学校関係〉

創立七十年史編集委員会　1969,『創立七十年史』岡山県立岡山操山高等学校創立七十周年記念事業実行委員会。創立百年史編集委員会　1999,『創立百年史』岡山県立岡山操山高等学校創立百周年記念事業実行委員会。「魁翁心語」編集委員会　1991,『魁翁心語－誠と愛の教育者武居魁助先生－』岡山県立岡山操山高等学校同窓会「魁翁心語」刊行会（＊1950年刊行の『魁翁心語』と思い出の手記，その他を合わせて刊行されたもの)。『操山論叢』各年度，岡山県立岡山操山高等学校。『岡山朝日高等学校　教育史資料』各年度，岡山朝日高等学校同窓資料室（＊なお本稿においては，分析資料の記述内容が重複する場合は『創立七十年史』を優先して用いた)。

IV. 分析結果と考察

1. 物質的な要素について

〈衣服（制服，制帽)〉

表4　岡山一中と二中の服装の比較

	制　帽	制服(上着)	制服(ズボン)
岡山一中	角帽	夏冬ともコンサージにゲートル巻き	ポケット有り
岡山二中	角帽(白線をフチ取ったもの)	ゲートルなし，夏服は霜降り	ポケット無し(当初)

『創立七十年史』,『岡山朝日高等学校　教育史資料』より作成

表4は，岡山一中と岡山二中（以下「一中」「二中」と略記）の服装の違いをまとめたものである。先ず注目したいのは，両校の制帽が角帽であるということである。当時中学での角帽は珍しく，また『広辞苑』によると，角帽は多く大学生の制帽とするところから，大学生の俗称としても使われるという。角帽は学校のプレスティージの高さを示していたと考えられる。二中の角帽については，以下のような経緯があるという。

「昔から一中は中学では珍しい角帽であった。二中が出来る時，二中もやはり角帽にしたいということだったが，同じ角帽ではまぎらわしいというので，角帽に白線をフチ取ったものが採用されたのだと聞いている」（Y・K　昭和3年卒,『創立七十年史』より，以下出典のないもの，頁のみ記載のものは『創立七十年史』による)

この角帽への憧れについては，

「白線角帽ゲートルなしの特異な服装は我々の自信をこめて誇らしかった」（H・H　大正14年4修,『創立三十年史』。『創立七十年史』の引用より)

「大正十年春四月岡山二中に入学して晴れの角帽をかぶった」（S・E　大正15年卒)

のような回想があり，昭和16年入学生から戦闘帽になると（＊一中も同年入学生から戦闘帽)，

「私達から戦闘帽，国民服となり，一年上級者は白線の角帽，つめ襟の制服で全く羨やましく，・・・」（K・K　昭和20年卒)

という回想も出てくる。また，二中がズボンにポケットを作ることを禁じたのは，「手を入れて不善をなす」という配慮かららしかったが（Y・K　昭和3年卒,

前出)，後に生徒の姿勢態度の点と特別のある理由で，右後に唯一ポケットを開けることに決まった（旧職員，A・M，『創立三十年史』。『創立七十年史』の引用より）とのことである。二中は規律がきびしく始終服装検査をされ（M・A　昭和4年卒），冬でもオーバー，手袋を禁止（O・M　昭和5年卒）で，一中とは異なり，かなりスパルタ的に，質実剛健の校風を作ろうとしたことが伺える。

以上物質的な要素を検討すると，二中の学校文化は開校当初から一中を意識したものであり，かつ質実剛健でスパルタ的なものを志向していたことが伺える。

2．行動的要素について

〈校友会〉

表5　岡山一中と二中の校友会の比較

	名称	成立年	成立事情	特　徴	雑誌
岡山一中	尚志会	明治19年	生徒の側から自然発生的・任意な有志の団体から生じた	途中から（明治28年），学校長の指導下に入った	尚志会雑誌
岡山二中	校友会	大正10年	学校発足と同時に，学校指導型の官製の団体として成立	文化部と運動部の各部活動を置く	校友（＊第二号までは「會誌」）

『創立七十年史』，『操山論叢』，『岡山県の教育史』，『岡山朝日高等学校教育史資料』より作成。

表5は，一中と二中の校友会の違いをまとめたものである。一中の校友会が生徒主導型で成立したのに対し，二中の方は学校主導型と対照的である。金谷によると戦前の中等学校の校友会の型は，1）生徒主導型，2）学校主導型，3）運動諸部・学芸諸部の統合・統一調整型，の3つに分けられるという[4]。

二中の場合，学校発足と同時に校友会創設の議がおこり，当時の全職員が起草委員となり，同年第一回総会を開催し，諸規定を可決した。武居校長は，校友会誌創刊号に文をよせ，「我が校友会は，本校の職員生徒を以って組織せる私的団体なりと雖も，その活動は，常に本校各般の施設教養の方針と策応し，本校教育の目的達成上，極めて重大なる意義を有す。」とした（以上228頁）。二中の校友会は，正に学校主導型で学校の教育方針を支えるものとして存在したのである。

なおこの校友会には，文化部4（会誌部・図書部・弁論部・庶務部），運動部9（柔道部・剣道部・相撲部・蹴球部・野球部・庭球部・競技部・球技部・水泳部）が置かれた。毎年の校友会誌巻頭言を通じて，武居校長が生徒に望んだこと，求められたことを知ることができる（229頁）。校長の書いた巻頭言は，学校創設期が二中教育を軌道に乗せるための訴えかけなのに対し，昭和6年の満州事変を機に，次第に軍国主義的な内容に向かっていったという（『創立百年史』116頁）。

校友会成立の型は学校によって異なるとはいえ，その目的が学校の校風樹立にある，とは先の金谷も指摘している[5]が，二中の場合校長自らが先頭に立って，校風樹立に努力したことが伺える。

〈軍事教練〉

大正14年4月陸軍現役将校配属令が公布され，中等学校においても軍事教練（学校教練）が行なわれるようになった。軍事教練についても回想によると，一中と二中は対照的な記述が見られる。一中は，以下のように軍事教練の成績が悪かったという回想が多い。

「（略）学校教練はよくない。その年（＊昭和18年）の四月二十九日（当時の天長節）に練兵場で，軍隊に次いで医大，六高，師範，青師，一中，二中という順に分列行進したのを各校長等と観たのであるが，一中の出来栄えはよくなかった。又射撃練習の状況を見た私はこれもその下手さ加減に驚いた。その秋行なわれた教練査閲の批評に査閲官は「概して可」だといったのを聞いて，私はやはり驚いた。聞く所によると，二中や関中（＊関西中）などは概して良好とのことだった。とにかくかようなことで軍の評判はよくなかった」（高畑浅次郎（＊元岡山一中校長）　1976，「在職中のあれこれ」『岡山朝日高等学校　教育史資料　第1集』3頁）

「（略）四年生の教練査閲も概して可なりであった。二中や関中と違い試験の数も多く勉強のしごき方が基本的に徹底している一中で，教練の成績を急に上げることは無理」（U・T　昭和18年4年生，1980，「岡山一中生の昭和18年」『岡山朝日高等学校　教育史資料　第8集』21頁）

これに対して二中は，軍事教練の成績が良かったという記述，回想が多い。

「教練の成績が抜群であったことは自他ともに認めていたところである（中略）毎年行なわれた査閲の講評には，いつも好評を得ていた・・・」（旧職員，N・T）

「武居校長先生の崇高なる御人格による教育の一部である学校教練の成績は県下第一位で，他県からの見学者が常に殺到する有様でした」（旧職員（＊学校配属将校）Y・J）

最後の回想にも記されているように，「思うに学校教練の目的はよく本校教養の方針と合致するものあり」

（『創立十年史』。『創立七十年史』の引用より）と二中においては軍事教練は学校の教育方針と合致しており，その結果として軍事教練の成績が良かったと考えられる。

以上行動的な要素を通して検討すると，先にみた物質的な要素と同様に，二中の学校文化が質実剛健でスパルタ的な側面を志向していたことがより明らかになってくる。

3．観念的要素について

〈学校の教育方針〉

一中は藩学の伝統を継いだエリートのための教育機関で，「自主独立の精神と刻苦勉励の習慣」「明朗闊達な気風」「至誠奉公の熱意」を教育精神としていた。明治20年代までの卒業生は，教師・軍人・官吏・技術者等に進出し，当初卒業生は東京・京阪神地方へ集中的に進出し，明治30年代になると地元岡山県でも活躍するようになり，特に医学界での活躍は顕著であるという（以上『岡山文庫48　岡山の教育』74-75頁）。卒業生の回想では勉強の厳しさに関するものが多く，しかもそれは，大正，昭和と時代が下がるにつれて厳しくなっているという指摘がある。

「一中での勉学の有様はどうかといいますと，これも厳しいという一語に尽きると思います。（大正10年の卒業生）」（太田　進　1979，「大正期における入試制度の変動と岡山中学・岡山一中の対応」『岡山朝日高等学校　教育史資料　第6集』9頁）

太田によると，大正10年過ぎに中学4年修了で上級学校に進学が可能となる影響として，受験勉強の時期が早まったこと，昭和初期になると六高合格者が一中での「つめこみ主義」の勉強を礼賛していること，すでにこの時期に夏休みの補習授業が行われていたことを紹介している（太田　同上　10-11頁）。

二中は初代校長の武居が，一中に対して二中の教育精神をどのように樹立するかに心を砕いた。その結果，教育の目的は外面的な知識教育でなくて，「人格の真髄に触れる魂の教育」「凡ての人にその処を得しむる」といった点に二中教育の独自性を求めようとしたという（以上『岡山県史　第三十巻　教育・文化・宗教』60頁）。武居は校風の中心要素として要望したのは，「真摯努力の習慣」「克己奮闘の習慣」「質実剛健の気風」「自律自重の精神」「愛校自治の精神」であった（207頁）。知徳体三位一体の全人教育を目指していたと捉えられるだろう。このことは，「二中は受験準備の予備校的性格ではなかった」（259頁）といった指摘からも伺える。回想でも以下のような指摘がある。

「二中は（中略）全人教育をねらっていたのでしょう。ただ二中の方が最近（＊昭和44年）云う道徳教育に熱心で大分かたかったようです」（O・M　昭和5年卒）

〈生徒の価値観・態度〉

一中は全国的にも有名な進学校だった[6]ので，進学に関する言説やラベリングが多い。二中はそのような一中と対照的に述べられている。

「○○大には死んでも行かん。（中略）（志望校に）何遍落ちても行かん。そうであろうが。一中の時にはそういう意地があろうが」（中山善弘　1979，「学徒動員と一中生気質」『岡山朝日高等学校　教育史資料　第7集』44頁）

「（略）当時一中は今で云う受験校で，がり勉で上級校へはいれるといった空気があったようで，六高でも私の組の半数は一中卒でしたが，例外はあっても一般にチャッカリした人が多く，二中から来た人は数は少なかったが，のんびり型が多く今からも好ましいように思います」（O・M　前出）

「（略）当時はよく一中と対比されたが，私は，都会的なエリート校の，悪くいえば，ギスギスした感じの一中より，おおらかな農村的な二中カラーの方が好きだった」（K・S　昭和19年卒）

以上観念的要素を通して検討すると，一中と二中の生徒が，エリート（冷たい）とのんびり（暖かい）という雰囲気の位置づけであることがわかる。

4．その他について

〈上級学校進学状況〉

上級学校への進学状況については，昭和25年刊行の『創立三十年史』によると，「岡山一中は高等学校に多数入学し，吾が岡山二中は専門学校に多数入学した」（『創立三十年史』。『創立七十年史』の引用より）とか，「二中は一中とは校風が異なり質実剛健は当時の武居校長の最も主唱するところで，随って陸海軍の学校入学者はゆうに一中を凌駕していた」（K・K　昭和20年卒）という記述がある。今回の分析では，資料の制約上二中の卒業生が出る直前（＊二中の第1回の卒業生は大正15年）とその後日中戦争が始まった直後

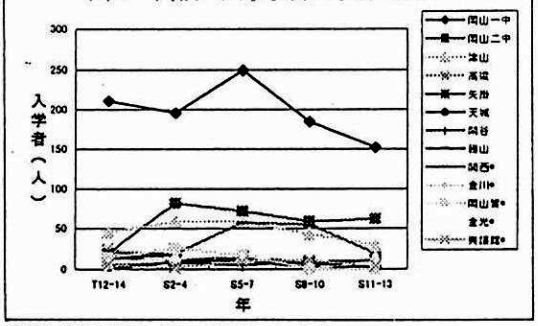
の昭和13年までを，３年ごとに５つの時期に分けて上級学校入学者の推移を文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』各年度を用いて岡山県全体で検討してみた。なおこの入学者は，現役の進学者と中途退学の進学者の合計で，浪人の進学者は含まない。分析結果をまとめると以下のようになる（表６－８，図１－3）[7]。

1．高校・大学予科では，入学者の約半数を一中が占めている。全体の入学者数は，昭和５-７年を境に減少している。
2．官公立専門学校でも一中の入学者が多いが，二中，津山中も全体の入学者数の１割以上を占めている。
3．陸海軍諸学校の入学者は，時局に対応する形で昭和11年以降急激に増加しており，全体の入学者数では一中が約１/３強，二中が約１/７を占めている。

表６　高校・大学予科入学者数

校名	T12-14	S2-4	S5-7	S8-10	S11-13	合計
岡山一中	211	196	249	185	152	993
岡山二中	19	82	72	59	62	294
津山	45	58	58	43	30	234
高梁	24	14	15	7	8	68
矢掛	14	11	16	8	10	59
天城	16	17	13	6	4	56
閑谷	5	8	5	9	11	38
勝山	0	9	11	2	2	24
関西*	21	19	57	55	19	171
金川*	8	13	19	0	9	49
岡山農*	14	26	17	－	－	57
金光*	7	16	16	11	15	65
興譲館*	5	2	10	11	4	32
合計	389	471	558	396	326	2,140

図１　高校・大学予科入学者の推移



文部省『全国中学校ニ関スル諸調査』より算出。
（以下の図・表も同じ）

表７　官公立専門学校入学者数

校名	T12-14	S2-4	S5-7	S8-10	S11-13	合計
岡山一中	78	144	122	108	110	562
岡山二中	3	108	52	41	78	282
津山	58	56	76	74	65	329
高梁	45	32	48	32	48	205
矢掛	35	28	25	15	5	108
天城	23	27	29	50	19	148
閑谷	6	9	7	4	8	34
勝山	2	28	13	13	21	77
関西*	61	67	52	34	12	226
金川*	27	28	13	2	6	76
岡山農*	17	26	20	－	－	63
金光*	40	30	18	17	14	119
興譲館*	13	11	16	23	8	71
合計	408	594	491	413	394	2,300

〈教員の学歴・学閥状況〉

武居が職員組織に関して留意したのは以下の５点である。

1．各種の経歴を有する者を適当な割合で採用すること。
2．学力以外に，教育する能力のある者を採用すること。
3．岡山県出身者を全職員の１/３以内にすること。
4．岡山県の県民性と反対の人情・風俗をもつ地方の

図２　官公立専門学校入学者数の推移

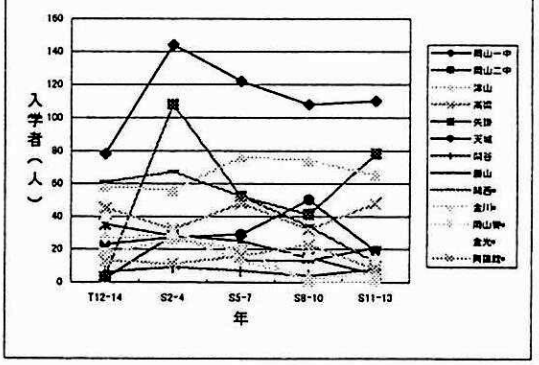
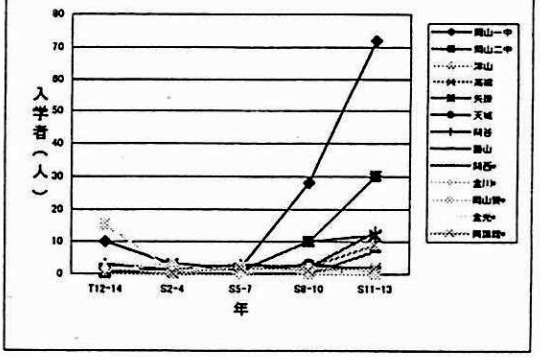


表８　陸海軍諸学校入学者数

校名	T12-14	S2-4	S5-7	S8-10	S11-13	合計
岡山一中	10	3	2	28	72	115
岡山二中	0	2	1	10	30	43
津山	2	2	2	3	12	21
高梁	0	0	1	2	9	12
矢掛	1	3	1	10	12	27
天城	0	0	1	3	1	5
閑谷	3	1	3	2	13	22
勝山	1	0	0	2	2	5
関西*	1	0	0	0	7	8
金川*	1	3	0	2	1	7
岡山農*	15	1	2	－	－	18
金光*	2	0	1	1	2	6
興譲館*	0	0	2	1	2	5
合計	36	15	16	64	163	294

図３　陸海軍諸学校入学者数の推移



出身者を若干採用すること。

5．職員組織上重点を置くべき学科をも考慮に入れて採用すること（以上『魁翁心語』より）。

この結果として，全職員の平均年齢27歳で，武居校長を中心とするさながら一大家族的な職員集団ができ，出身学閥による党派のようなものもなかったという（旧職員，N・K）。武居は自分の母校の広島高師出身者を二中に多く集めることもしなかった[8]が，二中開校時の大正10年には広島高師出身の教員が71.4％を占めた（ただし，大正15年には20.0％，昭和6年には14.3％へと占有率は低下していった）[9]。

V．まとめ

以上の分析した結果から岡山二中の学校文化をまとめると，以下のようになる。

岡山二中の学校文化は，質実剛健でスパルタ的な部分と教職員と生徒が一大家族的なおおらかな部分を合わせもつもので，それは開校時から25年もの長期にわたり校長を務めた武居魁助のパーソナリティに負う部分が大きい。

ここで指摘した「質実剛健でスパルタ的」な部分と「一大家族的なおおらか」な部分は，果たして共存するのか，対立するのか，またどのようにしてこの矛盾する面が統一されているのか。今回の分析では取り上げなかったが，学校関係者に対する筆者の聞き取りと，分析資料『魁翁心語』によると，武居校長が在職中次第に「禅」に傾倒していったという。このことが，先の問いに対する新たな分析の指標になるのかもしれない。この点を次の課題としたい。

註

1）ここで言うところの「二中」とは，主として大正中期以降地方都市に開校していった中学を指し，明治19年の「中学校令」公布後，各府県で何度か改称した校名の内の一つの○○県第二尋常中学の「二中」とは異なる。

2）「二中」は仙台，東京，神戸といった都市部を除くと，大正から昭和にかけて開校したところが多い。なお地方の「二中」でも，鹿児島二中，沖縄二中のように明治期に開校した学校は「一中」の分校として開校したところである（＊ちなみに京都二中も「一中」の分校である）。

3）日本教育社会学会編　1986，『新教育社会学辞典』東洋館出版社　117-118頁。

4）金谷達夫　1969，「中学校における校友会の意義とその成立過程」『操山論叢　第4号』岡山県立岡山操山高等学校　10頁。

5）同上　15頁。

6）昭和10年前後，欧文社（今の旺文社の前身）の受験旬報という雑誌の上級学校への進学状況からみた全国中学ランキングは，たいてい東京四中，東京一中，神戸一中，岡山一中，鹿児島一中，京都一中の順であったという（平岡　勉　1977，「昭和10年前後」『岡山朝日高等学校教育史資料　第4集』岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料室　29頁）。

7）岡山二中が最初の卒業生を出す大正15年以前に上級学校入学者が存在するのは，中途退学の進学者がいるからである。具体的には4年修了時で高校，海軍兵学校へ進学する者，1,2年修了時で陸軍幼年学校へ進学する者等々である。なお勝山中学の最初の卒業生は昭和3年で，中学岡山黌の最後の卒業生は昭和7年である。

8）記念誌『岡山尚志』編集委員会編　1989，『岡山尚志』，233頁。

9）片岡徳雄・山崎博敏編　1990，『広島高師文理大の社会的軌跡』，193頁。

分析資料以外の参考文献・資料

秋山和夫　1972，『岡山文庫48　岡山の教育』日本文教出版社。

黄　順姫　1998，『日本のエリート高校－学校文化と同窓会の社会史－』世界思想社。

ひろたまさき・倉地克直　1988，『岡山県の教育史』思文閣出版。

片岡徳雄・山崎博敏編　1990，『広島高師文理大の社会的軌跡』財団法人広島地域社会研究センター。

記念誌『岡山尚志』編集委員会編　1989，『岡山尚志』尚志会岡山県支部。

西山夘三　1992，『大正の中学生　回想・大阪府立第十三中学校の日々』筑摩書房。

岡山県史編纂委員会　1985，『岡山県史　第十巻　近代Ⅰ』，1987，『岡山県史　第十一巻　近代Ⅱ』，1989，『岡山県史　第十二巻　近代Ⅲ』，1984，『岡山県史　第十三巻　現代Ⅰ』，1990，『岡山県史　第十四巻　現代Ⅱ』，1988，『岡山県史　第三十巻　教育・文化・宗教』山陽新聞社。

〈付記〉岡山二中・岡山操山高等学校に関する聞き取りと学校関係資料のコピーについては，同校の同窓会係の貝畑信行教諭に大変お世話になった。記して謝意を表したい。